

加へらるゝ虚傳によつて、遂には不可思議の靈場とせられたり、無盡の寶を藏する場所として射利の輩を惹きつけたりするに至るは自然の事である。

基督教の宣布の爲に、前世紀の半頃から此の地方に入り込んだ歐洲の宣教師の人々は、土地の人々から屢々かゝる種類の傳説を聞き込んだもので、今世紀の初頃までに數へられた此の種の遺跡は十五程にも及んだ。多くは文字通りに掘出し物を捜し歩く此の地方のトレジュアー・シーカーの傳へたものである。一八九〇年〔明治二十三年〕に英國のパワー大尉が、庫車即ち古昔北道中に有名な國として存した龜茲國の西方程近き所に埋もれて居つた塔を見舞つて、その中から出た古き書物を土人から貰つたのであつたが、此の塔は前年即ち一八八九年に庫車の人が発掘したものであつた。發掘の動機は以前有名なヤクブ・ベッグの時代に土中に埋もれて居る古家の中から多くの財寶を見出したことがあり、それが一般によく知れ渡つて居るので、例の掘出し連中が、同様うまくあてる積りでやり出した仕事である。結果寶を掘出したか否かは知らないが、建物の庭から兩面を板に挟んだ書物と、一疋の牝牛と、二疋の狐の立つて居るのが見出されたことだけは能く知れて居る。無論牛も狐も立つてこそ居れ、生きて居るべき筈はなく、手を觸れると同時に恰も塵の固まりに觸れると同様、ぼろぼろに壊れてしまつたといふ。此の文書發見のことが歐洲に傳はつてから、漸次人の注意を惹いて、當時印度に奉職して居つた英のヘルンル氏は早くもかゝる遺物を蒐集する計畫を立て、一八九三年にはその議によつて、印度政廳から關係地方の官吏に訓示して、此の事業に盡力すべき旨を達した。北道の庫車の外にも、南道の于闐附近の廢墟から同じく土人の手によつて、古錢、印章、土偶、燒物、書物の斷片の類が採集せられて居つたが、こゝに於て此等の遺物は主としてカシュガルに